

第 19 回事故対策会議報告

教育遭対部長 中川和道

第 19 回事故対策会議が 2020 年 11 月 16 日(月)に開催され、10 山岳会 11 名（末尾注参照）参加のもとに活発な討論が行われた。この会議は 3 月 5 日に予告されていたが、新型コロナウイルス感染拡大のため 5 月 15 日に延期されたもののさらに再延期され、11 月 16 日にやっと開催されたものである。ご時世を反映して、初めて、遠隔会議システム Zoom ソフトを用いて開催された(写真 1)。

冒頭に園敏雄 大阪府連理事長からあいさつ：「事故対策会議は、事故の当事者や当事者に近い責任者が一堂に会して経験を語り合い教訓を探しあうことによって事故を減らしていく会合。事故当事者の不明や欠点を攻撃する 吊るし上げ的な会議や責任追及を目的とする会議ではなく、同じ場面に自分が立ったとき、事故を避ける判断の分岐点がどこにあったのかを学びあう会議にすべく運営しよう。当該の会や団体、パーティーで事故調査を行い、事故の経過の分析や再発防止の教訓を導き出して、その結果を、事故対策会議でご報告下さい。」中川の司会で討論に移った。その経過を以下にまとめる。



写真 1. 初めて Zoom で行われた第 19 回事故対策会議。

2019 年度 No.8

2019.5.25 13:00 TN 43 男 ピトンの会 雪彦山(不行岳)

不行岳温故知新ルート 2 ピッチ目を態垂下降時に、すっぽ抜けによる墜落。1 ピッチ目の斜面の木で墜落停止。傷病名:右ひざの剥離骨折、半月板損傷、全身打撲及び擦過傷。[OWAF 遭対補足：中級登山学校実技コーチ中の事故。ヘリ搬出。5/25 のみ入院]

校長大森宏和さんから事故報告書（10/23 作成）をもとに報告。コーチ、受講生、スタッフの 3 名で友人登路ルート、弓状クラックルート登攀後、懸垂下降 2 回。ジグザク下降路を下って事故が起きた懸垂点に。位置関係は、壁に向かって左端から懸垂点、コーチ、受講生、スタッフ。コーチは前の週に大森校長と下見を完了しており懸垂距離が 10m 程度しかないことを熟知していた。コーチは立木の残置スリングに 50m ロープ 1 本をとおして垂らしたが、この時、末端結びがなく、ロープのセンターも出ておらず、バックアップもなし。コーチがまず懸垂開始体勢に。受講生はチェックをと発言したがコーチは大丈夫との答えで討論はそこで途絶えた。事故後コーチにその記憶はない。懸垂開始後、コーチが数 m 下降した時、ロープの末端が下降器からぬけ、懸垂点のロープが走り始めた。受講生はあわてて流れるロープを停めたが間に合わず、コーチは岩場をバウンドしながら数 m 転落。たまたま生えていた丈夫な木に衝突して運よく停止。そのまま落ちていたら危なかったとのこと。ドスンという落下音を聞いた他パーティーが現場に向かう。コーチは意識明瞭、立ち上が

り、「右足が少し痛いが大丈夫。ねんざかな」との回答。介助懸垂までは不要とみて、4-5名のサポートのもとにさらに2ピッチ懸垂し、地藏岳東稜ルート of 取付き地点着。しかしこれ以上の搬出は無理との判断で、119番にヘリ救助要請。

討論では主に、(1)コーチの判断ミスが生じたこと、(2)技術的課題、について議論された。まず(1)については、コーチが新任であること、この実技山行が初陣であったことが述べられた。この弱点を克服する方策として、事故報告書では「現場ではお互いに指摘できるパーティーを作ることが絶対である」ことが述べられており、この方向性に一同賛成であった。が、受講生が注意をしたにもかかわらずコーチが大丈夫との結論を変えなかった事態を今後どう解決するか、あまりにも心労が大きくパニックになられたのではないかと、などが重く議論された。ひとつの解決策として、初陣のコーチには強力なスタッフと組を作ること、スタッフは絶対にひるまないこと、などが可能性としてあげられた。容易ではないかもとの心配も出された。

(2)の技術的課題について：どの登山学校で同じだが、技術全般にわたり、コーチの指導に自己判断の裁量の中級登山学校も認めている、受講生はこれによって複眼的視点を養い、自分で考えることの重要性を学ぶ一助となっていることがまず報告された。ロープ末端を結ぶことの欠点（木にかかるなど）が紹介され、結ばない懸垂も行われており、コーチの指導の個性までは統一することはできないことが紹介された。ここで懸垂事故の苦い教訓から「懸垂標準手順」を策定実施している大阪ぽっぽ会からとくに発言があり、「1本ずつ結ぶか2本結ぶか自由度はあるが、結ばない懸垂はありえない」と強調された。参加者に末端は結ぶかと尋ねたところ、参加者全員が「末端は必ず結ぶ」と答えた。園理事長は「大阪では、結ぶことを確認したい」と述べた。さらにいくつか議論はあったが、まとめとしては、「指導者の指導の自由度はいい面もある。しかし、こと懸垂の末端に関しては、必ず結ぶという方法で統一した学校運営をしてほしい、学校の間だけでも。」との方向性で一致した。中級登山学校には、検討を切におねがいしたい。

2014年12月23日開催の「懸垂下降の技術 検討会・体験会（緊急）」の「3つの提案」も紹介された。「1. 末端は結ぶ」とは「1本でも2本でもよいので結ぶ」の意味であり、「2. 目上の相手でも 互いに証拠で確認を」は、声での確認や指差し確認だけではだめだったとの苦い実経験から「結び目を見せること、結び目を見ないと信用しないこと」とのつよい発言が当日、故 川田一夫さんからなされたこと、「3. 各会で講習をやろう 身につくまで」は、「実際に落ちる実体験をすること」の意味だ（河野仁副会長）との発言もあった。DVD4.2GB やまとめの冊子6MBがあるので、ぜひ教育遭対部中川 climber-nak@bca.bai.ne.jp まで請求してほしい。

参加：10山岳会11名（ぽっぽから2名。1名参加の会は、つりばし、KONK、OAR、OWCC、カランクルン、雑木、泉州、teruru、きたろう、福島）

過去の事故対策会議の記録は、第1回(2011/3/5)以来、全て集積されています。大阪労山ホームページの「事故対策会議」のページ <http://owaf.aikotoba.jp/jikotaisaku.htm> で、ぜひお読み下さい。